

周辺地域と交流した「インダス文明」

増山雄三

現在のインド北西部のパキスタンを中心に
して、紀元前二六〇〇年頃から、約七百年間
栄えた「インダス文明」は、大海に育まれた
都市文明というイメージが強かったが、ハラ
ツパー遺跡やモヘンジョダロ遺跡の発見と発
掘により、その存在が明らかになった。

この文明が、どのようにして興起したかに
ついては、不明の天が多く、かつては、メソ
ポタミアとかイランからの影響があったとさ
れたが、インダス川流域とその斧で、独自の
文明への始動があった事は否めない。

またこの文明は、遠隔地からもたらされる
資源に支えられ、前記の都市遺跡のほか、多
くの小規模遺跡が工芸品の生産拠点になるな
ど、複雑なネットワークの上に成り立ってい
たことが、少しずつ分ってきている。

それは、メソポタミアやアラビア半島それに中央アジアなど、交易を通じて深く繋がりがあっていったほか、ペルシャ湾の島国であるバレーンでも、インダスの土器や装身具が出土しているからである。

このインダス文明が、いかに衰退したかについてでは、紀元前千五百年頃、インドに進入してきた、アーリア民族に滅ばされた説も一部にあるが、考古学上それを支持する証拠もなく、最近では、大規模の洪水を伴った、地球規模の地殻変動説が有力になっている。

歴史的に見ると、文明というのは大河が育てたともいわれ、「四大文明」と呼ばれている、メソポタミア・エジプト・インダス・中国の文明は、大河流域の農業生産力が、都市や社会を発展させたと考えられてきたが、最近の世界歴史学では、大河だけでない、高地で興った中南米の文明も発見され、文明への見方は変化しているという。

一方、紀元前栄えたインダス文明も、時代

像が変りつつあり、インダス川の沖積平野の農耕に支えられ、モヘンジョダロやハラツパ―など、レンガ造りの建物が並ぶ大都市という、大河文明のイメージが語られてきた。

だが、現地の考古学調査を続けてきた、上杉金沢大学教授は、モヘンジョダロやハラツパ―の周辺は、食料資源を除くと、都市の生活を支える食旅が非常に乏しく、周辺地域とのネットワークがなければ、文明は成り立つ事はできなかつただろう、という。

それで、近年になり考古学の研究で見えてきたのは、広範な地域との多様な交流の上になつて、文明が成り立っていた様相で、例えば、様々な青銅器の原料となる銅は、インダスの平野部では産出しないので、パキスタン南西部や、アラビア半島から齎された。

それに、インダス文明に生きた人々は、麦や豆を食べていたと言われてきたが、最近では、それに加えて、北インドで栽培された米類や、アフリカから持ってきた雑穀も食べて

いた事が、植物考古学の分析で分ってきた。
また、インダス社会のネットワークを物語る遺物に、石製のビーズがあるが、それは、見た目の美しいカーネリアンの紅玉髓や、メノウと碧玉などの小さな石に、精密な穴を開ける高い技術もあり、ビーズは紐を通して、装飾品に使はれていたようだ。
最近の発掘調査で、従来は農村と考えられてきた小規模の遺跡で、ビーズ作りが行われてきた事が分ってきたが、それは都市遺構だけではなく、こうした小さな遺跡がその社会の中で、重要な役割を担っていたのである。
そして、ビーズの石材は、広範囲からもたらせていたようで、紅玉髓は、アラビア海沿岸のアジャラートから運ばれ、また、アフガニスタンの山岳で採られる、美しい青の鉱物の、ラピスタズリも使われた。
さらにインダス産のビーズは、現在のイラクを中心に栄えた、メソポタミアの王墓からも出土するなどしているので、交易を通じて

各地で珍重されていたようである。

先の上杉さんは、まず資源の分布があり、その資源に支えられた、各地の地域社会群を纏める、政治経済的な力でバランスを取ったのが、インダス文明なのだろうが、インダス文字はまだ解読されていないので、どんな政治体制かは解明されていないもの、考えられていたより、複雑な社会だったという。

この文明の多様さというのは、文明が衰退する様相にも表れているが、それは、インダス文明が衰退した原因を巡って、大洪水や異民族の侵入など、これまでも様々な説が提起されたが、確かな事はよく分らない。

それが近年になって、「四・二k a イベン」と呼ばれる約四千二百年前に起きたとされる、地球規模の気候変動が注目され、降水量が減って水が少なくなる中で、遺跡が小規模化して、比較的水があった東の方へ、人口が移動した事が、考古学の検討で裏付けられてきたと、上杉さんはいう。

一方で、この衰退の時期を機にして、グジヤラートが西方との海上交易の拠点として繁栄するなど、単純に「衰退」という言葉だけでは、捉える事が出来ない動きもあつた。

当時の西南アジアは、インダスのほか、エジプトやメソポタミアそれにアラビア半島などが、大きく一つに繋がって、文明世界を展開していたので、これまでのような、「インダス文明」と一括りにしてきた概念を、考え直す時期にきているようだ。

ところで、インダスはメソポタミアの粘土板文書に、「メルツハ」と書かれた地域とされるなど、メソポタミアとの関りがこれまでも指摘されていたが、最近、交易を通じた広がり。より広範に及んでいた事が、ペルシヤ湾の島国である、バーレーンでの考古学調査によって、裏付けられてきている。

バーレーンには、紀元前二三〇〇年から前一七〇〇年頃まで、盛んに古墳が築かれていたが、それはペルシヤ湾の海上交通を独占し

ていたという、「デイルムン」の人々のものである、とされているものだ。彼らは、インダス同様、資源が乏しかったメソポタミアに、オマーンの銅やインドの木材などを運ぶ事で、文明を物流面で支えたのが、デイルムン商人だったと、現地で今も発掘を続けている、東京文化財研究所の、安倍主任研究員は話している。

このような、デイルムンの人々を葬った、古墳群の調査が進み、インダスに特徴的な土器や紅玉髓のビーズなどが、多数にわたって副葬されていた事も、順次に分ってきた。

上杉さんは、紀元前二〇〇〇年を過ぎた頃から、インダス系の遺物が大きく増えてきているが、それは、インダスが衰退に入っていく時期に、周辺地域との関りが活発になったのは、衰退のプロセスが、考えられていた以上に、複雑なものだったことを示しているのではないかと話している。

令和四年五月